Osaka Shoin Women's University Repository

女三の宮の乳母たち

久保　重

若菜の巻上・下に至って、内親王降嫁・明石の女御の皇子・皇女の出生・待望の第一皇子の立坊等を見、源氏は、弥が上にも栄達を加えるが、六条の院の内部では、目に見えない崩頽が進行する。女三の宮の輿入れに従って朱雀院から移って来た乳母や女房たちによって、六条の院を理想的楽土たらしめて来た、独自の秩序と調和とが、侵蝕を受けたためだと私には思われる。私は、六条の院の栄華の極みを象徴するかのような女楽の半面に、乳母らによる「秩序と調和の侵蝕」を見出し、柏木事件の発生の裏に、若い女房群による「均衡の侵犯」を発見して、乳母と女房たちが、それぞれ動機を異にし、性格を異にしながら、互に関連し合って、六条の院楽土を、内部から頽落させてゆくのを見るものであるが、本稿では、女三の宮の降嫁前後から、紫の上の発病までにおいて、乳母たちによる、姿を見せない侵蝕作用を探ることにしたい。

（一）

女三の宮に仕える女たちは、大別して、二グループに分けて描かれている。一つは、若い華やいだ女房たち、いま一つは、年輩の乳母たちである。宮が内親王だから、乳母は二、三人いる。それらは、作中に「御乳母ども」・「御後見ども」・「御乳母」・「乳母たち」・「御乳母などやうの老いしらへる人々」・「中納言の乳母」（以上、若菜の上）、「御侍従の乳母」・「大人びたる人」（以上、若菜の下）などと呼ばれて登場する。[注1] 池田亀鑑博士編『源氏物語事典』下巻の「女三宮乳母」の項には、「中納言の乳母と侍従の乳母の二人があり、左中弁の妹は侍従の乳母か。正嘉本古系図に「左中弁の妹」を「女三宮御乳母」としてあげ、「中納言君」すなわち中納言の乳母とは別項とする。」としており、同書の「系図」にも、「女三の宮乳母」

Osaka Shoin Women's University Repository

を両項に分けて、「備考」に、「侍従乳母ト中納言乳母トヲ同人ト見ルカ否カニ関係シテノ処置デアル」と注記している。二説とも、女三の宮の乳母を侍従と中納言との二名と見ているが、両者のほかに、もう一人乳母がいて、それが「左中弁妹」であることも考えられる。私が、「左中弁妹」を特に問題にするのは、彼女が、女三の宮の六条の院降嫁に際して朱雀院に働きかけるやり方が、この条にはそこまでの必要はないのにと思われるほど、ひどく特徴的なので、後々、物語の展開上、この個性が必要になる場面の伏線として、布設されているのではないかと思うからである。

乳母は、一般の女房とは別格で、養い君の養育者・教育係・守り役として、養い君からは終生頼り慕われ、周囲からも重んじられる存在である。特に、女三の宮の「御乳母」は、母女御を早く喪った宮を大切に守り育てて来たので、父帝朱雀院の信任が厚い。病勝ちの院は出家を思い立ち、後に残さねばならない鍾愛の女三の宮の将来を案じ、婿選びについて乳母たちに相談する。乳母たちは源氏を話題にのせた。最も重立った乳母は、左中弁の兄を持っていた。弁は、源氏の近臣を兼ね、且つ、女三の宮方にも伺候している。妹乳母は、左中弁に逢ったついでに

「上なむ、しかしか御けしきありて聞こえたまひしを、かの院にをりあらば漏らしきこえさせたまへ。」

と話を持ちかけた。彼女は、女三の宮の聟えらびに、まだ、乳母側から源氏の名が奏上された段階であるのに拘らず、「朱雀院が、六条の院に女三の宮を輿入れさせたいと望んでいられる。その旨を源氏に伝えてほしい」と、弁に独断で頼んだのである。弁は自分の意見として、次の様に述べた。

「源氏は多くの婦人を集めているが、大切に思っているのは紫の上一人である。女三の宮が御降嫁になれば、宮に張り合うことは、いかに紫の上でも不可能であろうが、それでもなお、気懸かりに思われる。（筆者注、以上を(1)とする）。

しかし、源氏は常々『この世の栄え末の世に過ぎて、身に心もとなきことはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬこともある。』と内々に云っていられるそうである。われわれが見ても、六条の院の婦人がたは、みな、源氏の御身分にふさわしい声望を具した人でない。宮の御降嫁があれば、いかにお似合の仲であろう（筆者注、以上を(2)とする）。」

妹乳母は、弁の言葉として、右を朱雀院に報告する際、(1)の部分を全く隠蔽し、(2)の部分についても、自分の都合のよいように変形して

『かの院にはかならずうけひき申させたまひてむ。年ごろの御本意かなひておぼしぬべきことなるを、こなたの御許しまことにありぬべくは、伝えきこえむ』となむ申しはべりしを、いかなるべきことにかははべらむ。」

と奏上している。重々しく堅苦しい左中弁の、思慮深い言葉が、乳母の好き勝手に言い曲げられて、源氏は何も聞いていない中に、年来、女三の宮を所望していたことにされてしまい、弁は進んで源氏のもとに使者に立とうと申し出たことになった。源氏側の承引間違

Osaka Shoin Women's University Repository

いなし、と朱雀院に印象付けることを、この乳母はもくろんでいるのである。しかも、この乳母は語を継いで、自分の意見として、

「1、源氏は妻妾たちをその身分によって巧みに処遇し、またとない行き届いた心ざまの人であるが、姫宮が心外なと思われる事が、あるかも知れない。

2、姫宮との結婚を志望する人は多いのだから、院は、よくよく考慮して婿君を選考なさるとよい。

3、当世では、自分の考えをしっかり持って、この世を自分の思い通りに過す姫君もあるが、宮はおぼつかなく心もとなくのみ見えるので、しっかり後見をして差し上げる夫がなければ、心細いことだろう」

など言葉多く申し上げる。あれこれと話題を転じつつ、結局、彼女は最終責任を院に転嫁しながら、源氏こそ女三の宮の夫として最適任者だと推薦しているのである。

彼女の望は、わが姫宮が、最高の男性と結婚し、最大の幸福な生涯を送りたまうことである。その並々ならぬ熱意の源は、養い君に対する溺愛と、彼女が兄の弁に語った通り、朱雀院が四人の内親王のうち、女三の宮だけを偏愛するのを嫉む他の姫宮の乳母らに、嘲笑せられたくないので、わが姫宮には「塵も裾えたてまつらじ」と力む乳母根性である。これらの点は、宮の乳母の、残りの二人も同じ気持であろう。しかし、この左中弁妹は、行動力・画策力を持つ点で、巧妙な話術を駆使したり、強力な身方を引き入れて目的貫徹に利用する点で、特殊的である。後々、彼女から何かしら事が起りそうな予感を抱かせる存在である。

朱雀院は、永い熟慮の末、多くの候補者の中から、女三の宮の夫として、源氏を選ぶ。

「かの六条の大殿は、げに、さりとものの心得て、うしろやすき方はこよなかりなむを、かたがたにあまたものせらるべき人々を知るべきにもあらずかし」

「六条のおとどは、女三の宮を正室として、内親王の身分にふさわしい待遇をしてくれるだろう。大勢の妻妾のいることは考慮しなくてもよかろう」というのが、選定理由であった。東宮も源氏を推薦した。「人物がよくても、臣下では物足らない。六条の院に、親ざまにということで、宮を委譲されるのがよい」という意見であった。

源氏が、朱雀院の病気見舞に訪れた機会をとらえて、院は女三の宮の後見を引き受けてくれるよう、源氏に依頼した。かねて、左中弁から、女三の宮は故藤壺中宮の御姪と聞いて、心を動かしていた源氏は、院の申出を、進んで承諾した。

年が改まった二月、婚儀は盛大に行われた。輿入は女御入内の儀式に准ずるものであった。朱雀院は、准太上天皇に対する礼を尽したのである。源氏は、朱雀院に対する敬意を表すために、臣下の礼をとって、みずから、御車を寄せるところに出て、姫宮の御手を執って降しまいらせた。『河海抄』は「臣下の礼は、妻を迎時は身づから車を寄する礼也云々。院中の儀には、此儀あるべからざる歟。然而、六条院ただ人のごとくふるまひて卑下し給よし歟。」と云う。その通りに違いないが、源氏が故藤壺中宮に抱いている永遠の憧憬

Osaka Shoin Women's University Repository

が、この前代未聞の、最高にみやびな、まるで絵巻の一場面のように浪慢的な、甘美な婚儀様式を、彼に演出させたであろう一面を、われわれは見落すわけにはゆかない。源氏が、その昔、桐壺の帝に伴われて初めて見た頃の藤壺は、少女内親王の女御であった。

源氏は准上皇にしてただ人という独得の身分を、これまでも自在に楽しんでいた。准上皇として、宮中の行事をも自邸に移し催し得る特権と、宮廷の制度・慣習の緊縛を受けない自由とを、存分に駆使して、彼の審美眼を満足させる、特異な絢爛たる行事を創案して楽しんで来た。この「例に違ひたる」婚儀のように、既成の作法に囚われない自由な発想と、創意に基くやり方、それが、六条の院の作法であり、文化であり、誇であった。女三の宮の輿入れに、乳母たち・女房たち・女童らが、大勢つき従って朱雀院から移って来た。女童を計算に入れないでも五六十人はいる（鈴虫）。姫宮は春の町の寝殿の西面を住まいにし、乳母や女房には、西の一、二の対・渡殿にそれぞれ局を賜った。彼女らは六条の院文化圏の市民となったのだが、誰もそれに気付いていない。同じ仲間同士大勢で、広大な一角を占拠し、姫宮の朱雀院在住時代と全く同じ雰囲気で、独立した誇り高き生活圏を形成している。彼女たちの給付は、一切、女三の宮の収入で賄われていて（鈴虫）、源氏の世話を受けない。

新婚三ケ日の間、朱雀院側と六条の院側との双方で、盛大な饗宴が交わされた。源氏は作法通りきちんと姫宮を訪れる。宮が「いわけなき御有様」なので、乳母たちは側近く付添っている。三日目の暁方、源氏は紫の上の幻影を枕上に見て、胸が騒ぎ、一番鶏の声を待ちかねて、宮のもとを去る。真暗な、雪明りの戸外を、足早やに急ぐ源氏を見送る乳母たちは、「闇はあやなし」と呟く。不満なのである。四日目、源氏が、東の対で紫の上と終日語り暮して、宮のもとには不参の消息を持たせて使者をやる。と、「さ聞こえさせはべり」と、乳母が言葉で返事をして、使者を還えしてしまう。新婚早々というのに、礼儀を欠くと立腹したのであろう。五日目、源氏は宮のもとに昼訪れる。『岷江入楚』に「三夜までは、よるばかりわたり給へるなるべし。ひるは、けふはじめてなるべし。女御入内の後も、五日めなど露顕とて、ひるわたりおはする事あり。（略）その准拠なるべし。女三の宮わたり給時も、内に参り給ふ人のさほうをまなびてとあり。」と注している。入念に身じまいをした源氏を、白昼の光で初めて見る若い女房たちは讃嘆して見上げる。「姫宮が迎えられた婿君」という感覚で評価しているのである。しかし、乳母らの中には、

「いでや。この御有様一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかし」

と思う者もある。「めざまし」という語は、女三の宮の結婚問題について評議した際に、朱雀院と乳母らの間で、何度も口に上っていたのが思い出される。多妻制のもとで、高い身分の皇女が、身分の劣った女に、夫の愛を奪われることが起るのを、問題にして使っていたのであった。相手を見下した、非常に強い身分意識を背景に持つ言葉である。乳母たちは、昨日の早暁と夕方の経験で、源氏が紫の上に強く心を惹かれていること、そしてその愛は、朱雀院と彼女

Osaka Shoin Women's University Repository

らが予想していたような種類のものでないことを直感したのであった。普通はこのような場合は、「安からぬこと」・「わづらはしきこと」と思うところであるのに、「めざましきこと」と思ったところに、気位の高い権威主義的な乳母の、意識の特殊性がある。彼女たちの頭の中は、血統と位階序列を重んじる宮中風の秩序感覚で築き固められている。帝を父、皇女を母に持って出生し、数ある内親王の中で、父帝から別格の寵愛を受けて育った女三の宮は、乳母たちの考では、ただ人の半面を持つ源氏よりも、尊貴な地位にある。その姫宮が疎略な扱いを源氏から受けたり、出自の卑しい、親王の庶子に過ぎない紫の上よりも劣勢の待遇を与えられたりすることは、許し難い秩序の無視、無法、無礼、不埒であり、また、「御乳母」の自尊心をも甚だしく傷つけることであった。一方、紫の上は、女三の宮の降嫁に腹を立てている女房を諭す際に、「かたじけなく心苦しき御ことなれば、いかで心おかれたてまつらじとなむ思ふ」と語っていた。これは勿論、紫の上と宮の乳母らとの性情の差異から出た言葉づかいのちがいではあるが、乳母たちが宮廷的権威主義思想の持ち主であり、六条の院側にとっては、ひどく異質な侵入者を抱かえ込んだことだけは明らかである。

五日の露顕に、源氏も昼間初めて見る女三の宮を評価している。宮殿風の壮麗な調度、格式張ったしつらいとは対照的に、盛装して座に着いている姫宮はあまりにもあえかで幼なげである。幼稚で何の能も弁えもないのに、源氏は期待が外れて、すっかり失望する。打てば響くようであった、宮と同年齢時代の紫の上の優秀さが、更めて痛感され、理想通りに成長した現在の紫の上を、われながらよくもここまで教育したものだと思う。女三の宮の輿入れ後は、いよいよ紫の上への思いが増して、一夜の隔ても恋しく心に懸かる。宮には愛情が湧かない。ただ朱雀院の思惑を憚って疎略にしないというだけである。源氏の夜離れを乳母たちは不満に思って噂をし合っているが、心幼い姫宮は、別段気に止めていない。素直で煩わしさがないので、源氏は可愛いい遊び相手と思っている。夏の頃、紫の上は源氏の許可を得て、女三の宮と対面した。朱雀院から山の御寺に入るに当って、源氏と紫の上とのそれぞれに、親書を賜ったことがあったので、紫の上は院に対する儀礼上も捨てておけないのである。対面の席で、紫の上は中納言の乳母を召し出して、宮と親しくしたいと思うと云う。中納言は、宮に代ってその申し出を喜んで受け入れ、「出家なされた父の院はいわけない姫宮を紫の上が養育して下さるように望んでいられ、われわれ乳母にも、内々そのように云って居られた」と答えた。以後は、紫の上と女三の宮とは、手紙の贈答をしたり、遊びごとを共にするなど仲睦まじく交った。事ありげに噂を立てていた世人も、この事があって後はみなおさまった。――女三の宮の乳母たちについては、この後六年間、新帝の即位まで、物語の表面に何の話も出ない。

源氏の四十歳の賀が、紫の上・秋好む中宮・冷泉帝の勅命を受けた夕霧らによって、次々、盛大に催されて年が暮れた。翌春には、明石の女御が、待望の皇子を出産した。東宮には第一皇子、源氏には初孫である。六条の院では、豪華な産養が続く。源氏も紫の上も、

Osaka Shoin Women's University Repository

尊い身分の初孫の世話に明け暮れている。女三の宮は、相変らず源氏に構ってもらえないでいる。人目につく上べの格式は、正室内親王として、「世の例にしつくべく」立派にかしづかれているが、明石の君でさえ

「宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、（源氏の）わたりたまふこともえなのめならざめるは、かたじけなきわざなめりかし……」

と陰で云う程度の待遇である。夕霧の眼にも

「（女三の宮は）人の御程を思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、（源氏は）取り分きたる御けしきにしもあらず、人目の飾りばかりにこそ」

と映り、世人も

「（女三の宮は）対の上（筆者注・紫の上）の御けはひには、なほおされたまひてなむ」

と噂している。

（二）

物語は四年の空白の時期を経て、冷泉帝が譲位、朱雀院の皇子、春宮が帝位に就いて、御代変りを迎える。女三の宮は二十一・二才である。新帝は、皇妹女三の宮について、東宮時代に、父朱雀院から依頼されていたこともあって、特に配慮するので、宮の声望は加って来る。しかし、源氏は紫の上を深く愛しているので、宮は依然として、紫の上の勢に勝つことはできない。

朱雀院は、勤行三昧の生活の中にあっても、女三の宮のことだけが、念頭を離れない。

姫宮の御ことをのみぞ、なほえおぼし放たで、この院（筆者注・源氏）をば、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、うちうちの御心寄せあるべく奏せさせたまふ。二品になりたまひて、御封などまさる。いよいよはなやかに御勢添ふ。

朱雀院が、六条の院の正室となって久しい姫宮について、なぜか、夫源氏を、対世間的の後見としか考えていないというのは唯事ではない。朝覲の行幸という大掛かりな晴れの儀式の場で、俗世を棄てた法皇が、姫宮に関しての内々の個人的な頼みごとを、奏請するのは、更に、唯事でない。院は余程の切迫した心痛を抱えこんでいたればこそ、この、無法とも云える挙を決行したのであろう。朱雀院は、内攻的性格で優しく思慮深い人がらに設定されている。その人が、朝覲の行幸に際して、女三の宮の保護を懇願したのだから、院が、傷ついていること悲しんでいることの深さ大きさは測り知れないものが想像できる。院は、女三の宮が、不幸な結婚生活を続けているのに耐えられなくなっているのだと思われる。宮が源氏に顧みられないでいると、告げ口をする者がいるのである。院を惑乱させるほど、源氏と紫の上に対する不満感と不信感を、院の耳に心に注ぎ続けた者がいるのだ。その者は

1、宮の日常生活に詳細に通じている、側近者であろう。

2、院にじきじき密奏できる地位を持ち、

Osaka Shoin Women's University Repository

3、院がその語るところを信じるだけの深い信頼を、院から得ている者である。

宮の側近といえば、女房たちもいるが、並の女房では(2)と(3)が欠ける。その上、彼女たちは、「ひたぶるにうちはなやぎ、さればみ」、享楽的自己中心的で、山の御寺まで、姫宮のために足を運んだりする気はなさそうである。乳母たちならば、(1)〜(3)をみな充し得る。その上、彼女たちは、宮の輿入の当初から、「源氏が紫の上に心惹かれて、宮に冷淡だ」「無礼だ」「心外だ」と腹を立てていた。その辺から始って、源氏の四十の賀にも、女御の皇子出生の産養にも、第一皇子の立坊の際にも、源氏一家の行事に、一切、宮は除け者扱いにせられて来たこと——、宮の方から進んで祝意を表するべき処なのだが、乳母は源氏の不親切と受取っていたのであろう——源氏が紫の上のみを大切にし、宮は常に、紫の上の勢に圧せられて来たこと等、細大洩らさず乳母達の不平が、輿入れ以来六年間、院の耳に達していたことであろう。われわれは、乳母たちの中に、かの術数に長けた「左中弁妹の乳母」がいることを憶えている。女三の宮が、源氏の夜離れを気にしていないことは、院は知らなかったようだ。紫の上と親しい交際をし、遊びを共にし消息を交わしていたことも、知らされていなかったらしい。乳母たちの中には、宮の生活の平安さは隠蔽し、自分達の抱いている主観的な不満や、源氏と紫の上に対して持っている批判や反感を、宮の受苦として歪曲して報告し、院の親心に深刻な不安感を植え付ける者がいたのではなかろうか。院を混乱に陥れるほどの、凄まじい、事実の誇張・摩り替え・隠匿などが行われたり、巧妙な話術と強い説得力が作用したことも想像できる。ひよっとすると、帝の後見を奏請することも、彼女らの中の誰かが院に入れ知恵したのかも知れない。密奏の場面は描かれていない。告げ口をした者も、告げ口の内容も、最後まで不明である。姿無き告げ手・不明の内容ということで、密々の内奏の不気味さが、暗示せられているのをわれわれは感じ止めればよいのだろう。院が乳母たち不平分子によって攪乱せられた結果、本来は長所であった院の優しさが、彼を不安の底に突き落し、彼の人柄を矮小化し、窮極的には、源氏と紫の上とに深い傷を負わせることになった。告げ口を院が取り合わなかったら、密奏は影を潜めたに違いない。そうして院は、当初そうであったように、源氏の誠意と良識とを信頼して、鍾愛の姫宮の成長を、永い目で、遠くから眺めていればよかったのである。しかし院は、乳母らを信じ、源氏に対しては不満を、紫の上に対しては嫌悪感を次第に募らせていった。院は、源氏の抱いている彼独自の価値観を理解することが出来ないで、乳母達の抱いている身分意識に関しては、共感することが出来たからである。院には、宮廷風の秩序の観念があり、内親王の尊厳は犯されるべきでないという信念がある。その思想は、帝にも共通するものである。帝が、朱雀院の懇請を耳にして、忽ちその心情を理解し、皇妹の後楯を引き受けたのはその故である。帝は女三の宮を二品に昇叙した。天子にできる範囲内の最大の配慮を、父院の依頼に応えて皇妹に加えたのである。宮の位を高めることで、准太上天皇の正室としての格式を、一層、整えて上げたのである。正室の皇妹内親王

Osaka Shoin Women's University Repository

が、二品に叙せられ、封戸が増え格式が高まったので、六条の院の栄光は更に加わる。源氏は栄達の頂点を極めることになった。しかし、もとより昇叙に相当する功績が、女三の宮にあるのではない。朝覲の行幸の直後、宮の位が進められた――明敏な源氏には、その意味がよく解かる。経緯もほぼ見当がつく。帝の無言の要請を、彼は恐懼して承け止めねばならぬ。紫の上に対しては、無言の批判であり、圧迫である。彼はこれをも承服しなければならない。新帝の御代になって、彼の対天皇関係は大きく変化した。冷泉朝では、彼は天子の補佐者であったが、現代の彼は、立后を期待している女御の父、その所生東宮の外祖父として、二人の後楯の立場にいる。常に帝の意向を敏感に察知し、これを迎えねばならない負荷を背負っている。帝の心寄せの厚い皇妹内親王を疎略に扱っていると、帝に聞かれたてまつると困る、と源氏は思う。冷泉帝時代は、女三の宮の待遇が紫の上に劣ると、朱雀院に報告が届いていても、源氏は気付かない風を装うことも出来た。しかし、今や、彼は帝にも気を遣わなければならなくなった。帝が、女三の宮の後楯に加った結果、朱雀院は、自身では気付かない中に、源氏の生活体系に制肘を加え得るほどの圧力に成長した。同時に、それは宮の乳母たちの見えない批判が、六条の院の独特の自由の秩序と調和に、牽制を加え得るほどの勢力となり得たことでもあった。源氏が宮を訪れる回数が、紫の上と等しくなる。「わたりたまふこと、　やうやうひとしくなりゆく」――短い表現が却って、加わる圧力の重さをずっしりと感じさせる。紫の上は源氏の訪れの変化に不安を感じるが、耐えている。

乳母たちや朱雀院や帝の「女三の宮は、内親王なのだから、源氏は夫としての愛情を最も優位的に傾注しなければならない」という理屈は、源氏には通用しない。内親王だから、正室として格式に相当する鄭重な取り扱いはする。今までもそうして来た。しかし愛情は自然感情だから好みに従って自由でありたい。しかも、源氏にとって、それは、単なる感覚の問題だけでない。原理的に彼の価値基準は、宮廷風の位階格式を基準とする発想とは、根本的に対立するのである。源氏は既成の規矩に拠らない。彼自身の美意識と価値判断で、六条の院の一切が律せられ、[注2]特徴的な独自の秩序と調和が保たれているのだ。彼は、[注3]女性を自身の身分や後援者で評価しようなどとは、夢にも思わない。もっと高次元の、本質に根ざした価値を、当人自体が固有する魅力を、彼自身の審美眼を満足させる容姿・知性・情感・才気・教養・能力を、尊重する。だから六条院世界では、正室が内親王であること自体、必ずしも必要としない。准太上天皇の権威とただ人の自由とを享有する源氏は、自分の好みに合せて六条の院を築き、自分の好みに適った女性、紫の上に愛を傾けて暮して来た。少年の心に「かかる所に思ふやうならむ人をすゑて住まばや」（桐壺）と願った彼が、　その理想通りに教育した紫の上こそ、六条の院を楽土たらしめ、支えている不可欠の伴侶である。後見を持たず、源氏の愛情のみを頼みにする彼女だが、それ故にこそ源氏にとっては、六条の院世界と同義的な理想的存在なのである。

源氏は、帝の暗黙の要請に応えて、女三の宮を訪れる日数を紫の上と等しくした。これが、六条の院の生活体系に、異質の外部勢力

Osaka Shoin Women's University Repository

による侵犯を受けたことになるのに、源氏は気付かない。ある日、朱雀院から女三の宮に対面を求める手紙が届いた。非常に切迫した憂慮が偲ばれる文面である。源氏が、紫の上と共に過したい日を割いてまで、宮に奉仕している細心の心遣いなど、院は全く知らないらしい。通報は行われているのだが、源氏のこの新しい努力は告げられていない。報告者の故意による隠匿か、源氏が宮と紫の上と同等に扱うことが、許せない非礼と受け取られているのか。兎に角、院は、宮が二品昇叙後も、依然、紫の上の存在のために、不当の圧迫を受けて不幸であると思い込まされている。院は、最後の頼みにしていた帝の配慮も、源氏を動かし得なかったと落胆し、心幼い無力の姫宮を悲惨な状態に放置したままでは、執着が残って極楽往生が出来ないと焦慮の果て、対面を思い立ったのであろう。源氏に宮を委託したのを後悔し、宮に逢って実態を確かめた上で、宮の今後の生活に安堵の出来る方針を確立しようと心に決めているのであろう。しかし、朱雀院の望み通りに、対面が行われたら、それは、世間の眼を忍ぶ父子の涙の対面。その結果から生じるものに幸福は期待できない。第一、そのような事が行われては、朱雀法皇・二品内親王・六条の院、それぞれの世間に対する面目は丸潰れである。源氏は、これに代えて、父法皇と、御女六条の院正室二品内親王との、堂々たる晴れの対面、一世の注目を集め、後々までの語りぐさになるような、華やかな幸福感溢れる対面の場を、院と宮とのために設けようと思い立った。丁度、朱雀院は明年五十歳を迎える。源氏は、二人の恰好の対面の場を思い付いた。女三の宮の主催で、正月に院の御賀を院の御所で催し、宮から若菜を奉るとよかろう。早速、楽人舞人を選定し、盛大な賀の催しをと計画を練っていると、院が、

「参りたまはむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとも琴ばかりは弾き取りたまひつらむ」

と陰でひそかに云ったのが、帝の耳に入り、帝が

「げにさりともけはひことならむかし。……参り来て聞かばや」

と云ったのが、漏れ伝って来た。院の「さりとも琴ばかりは」という言葉は、源氏の胸に突き刺さった。帝も宮への心寄せをあらわしたという。源氏は棄ててはおけない。宮を委託したことを後悔しているらしい院の信頼を取り戻すために、また、宮を二品に昇叙した帝の心寄せに対して、源氏が積極的に応えている状態を、帝に見せるために、源氏は、宮の琴の技量を以って、彼の愛情と誠意の実在を証明しなければならない。音楽に堪能な院と帝の鑑賞に堪えるだけの実力を、何としても、宮につけなければならない。源氏は、紫の上に暇を乞うて、明けても暮れても、年の瀬も正月も、宮に付き切りで、特別教育に精励する。琴は、源氏の最も愛する楽器（須磨）で、最も得意とする楽器（絵合）であるが、彼は紫の上にも、愛娘の明石女御にも、夕霧にも、其の他誰にも伝授していない。女御などは、無理をして里邸退出をしてまで、宮の琴を聞きたがる。宮は心もとない人がらながら、源氏の巧みな指導のお蔭で、御賀のために源氏の選んだ、秘曲の二三、奥許しの大曲などを、弾きこなせるまで上達した。紫の上は、楽しげな音色が洩れて来るのを聞きながら、寒い淋しい夜を過している。賀は、帝の主催のが済んだ後、二

Osaka Shoin Women's University Repository

月二十五日、と定めて、年が改ってからは、楽人舞人なども召して、大規模な練習が繰り返えされる。源氏は宮に、院に対面する際の心得など、幼児を諭すように教える。乳母たち女房らはそれを感謝の眼で見ている。彼女たちは、この数ケ月、源氏が宮に付き切りなので上機嫌である。

源氏は、女三の宮の琴のリハーサルを兼ねて、正月二十日頃、梅の花盛りの寝殿で、女楽を催した。琴は宮、箏は明石の女御、和琴は紫の上、琵琶は明石の君。笙と横笛は右大臣正室玉鬘の長子と夕霧の長子、二人は、殿上童である。拍子は大納言兼左大将夕霧。源氏が灯影に見る四女性は、それぞれに美しく、若柳や花に喩えられる。演奏は出色の出来ばえで、殿上の御遊をも遥かに凌ぎ、六条の院の文化水準の高さを示した。用いられた名器、演奏者の技量・容貌・身分・将来性まで見事に揃った顔ぶれ、その上所から折からに梅と朧月まで添って、六条の院一門の繁栄を象徴するような盛儀であった。源氏は満足であった。何よりも、宮が、父法皇の御前演奏に適う水準に達しているのが嬉しく、宮を可愛いと思った。しかし、紫の上は心の深処に大きいショックを受けた。女楽の場は、一切宮廷風に取りしきられていた。演奏者の座は、宮中の視点から見た地位の順に設けられていた。(注4)秘蔵の名器が鄭重に運び据えられる、それもまた身分の順、地位の低い方から置く。紫の上は末席から二番目、最上座は女三の宮が占めている。席上で、源氏が琴を調絃して、宮の前に奉った。「二品内親王」に対して礼儀を尽すのであろう。(注5)いずれも優れた技量を見せた四女性の中で、紫の上の和琴の華麗な奏法と、明石の君の琵琶の神秘的な音色の冴えとが特に秀でていた。なぜか、源氏は琵琶だけを絶讃した。この夜の彼は、珍らしく熱弁を揮って、音楽を論じ、琴の価値の高さを力説し、その伝来・名手の伝説・奏法の困難さに蘊蓄を傾けた。女三の宮が、その困難な弾奏を立派に果したことを、源氏が賞讃したのだという印象を、一座の者はみな持った。女三の宮の並々ならぬ格式の高さを人々は更めて目にし、鄭重にかしずく源氏の姿に、瞠目の思いをした。最後はくつろいだ合奏となり、源氏は催馬楽の「葛城」を繰り返し歌う。その歌詞から、彼が、家門から女御を出し、東宮をはじめ皇子女を後見し、皇妹二品内親王を正室に賜っている、現世の栄光に酔っているように見えた。明石の女御・皇子ら・女三の宮はすべて帝の一族、明石の君は女御の生母。紫の上だけが、仲間外れである。彼女は孤独感を嚙みしめていた。冷泉帝の治世には、源氏は超越的な偉大な存在であった。従って、紫の上も、闊達に明快に振舞い、生活することができた。彼女は源氏の愛を殆ど独占し、彼の心の中に最高の地位を許されて、誰にも制肘を受けずに過して来た。源氏だけを後楯に頼んで来た身であるが、肩身の狭い思いをした経験がない。今夜までの六条の院は、世俗の権威とは無関係の、独自の秩序と調和を誇とする別世界であった。この世界では、女性を、出身を基準に順位をきめるようなことは行われていなかった。その秩序も調和も誇も、肝腎の超越者も、どこに消え失せてしまったのであろうか。紫の上は、ひどく異質のものが、六条の院の最も特徴的な生活体系を侵犯しているのを、はっきりと感知した。女楽の美しい後味とは裏腹に、喪失感というか、剝落感というか、寂莫たる気分に浸りな

であろう。源氏が、女楽の奏者の座を、管絃の座の次第の順に定め

Osaka Shoin Women's University Repository

裏腹に、喪失感というか、剝落感というか、寂莫たる気分に浸りながらも、彼女は自分を制して、催しの終った後、女三の宮の話相手をつとめて、暁に東の対に帰った。

源氏は、今日は終日、紫の上のもとでくつろいでいる。彼は、彼の昨夜の行動が、六条の院の価値観とは全く対立的な、女三の宮の乳母たちの要望を充足させるものであったことに気づかない。彼が管絃の次第に拠らず、宮を最も上座に据えたのは、彼の主観に従えば、決して、権威に屈したのでも、形式主義に変節したのでもないのであろう。朱雀院と帝とに心を配って、「皇妹二品内親王」の地位に対する待遇をしたのであろう。しかし、その結果、彼が弱者に対するいたわりとして宮のために計らった事が、ことごとく宮の格式を強調表現する効果を帯びるに至ったのだった。宮が、日常用の手馴れの琴を使用したのが、他の名手たちの晴れの名器に、褻の楽器で対応したことになった。宮の琴の調絃は、淮太上天皇が奉仕して行い、東宮の女御の大納言兼大将の調絃とに、大きく水をあけ、紫の上と明石の君とが、みずから調絃したのに対して、比較を絶した格式の高さを示すことになった。明石の君が、身の程を顧みる謙虚さから裳を纏っていたのを、正室二品内親王に対する表敬と解釈した者もあったであろう。その人々の眼には、紫の上も、明石の君と等しく、女三の宮に対しては臣下格に映ったのであろう。宮の琴のリハーサルが、女楽の主目的であり、またかねてから紫の上も女御も宮の琴に興味を寄せていたので、源氏が長々と琴について語ったのだが、一座の人々には、宮への讃辞としての印象が強かったのであろう。源氏が、女楽の奏者の座を、管絃の座の次第の順に定めていたら、この様な誤った印象は一切生じなかったであろう。女楽の座には、花散里を除く六条の院の全員が顔を揃えていた。女君たちの伴って来た女房・女童も大勢侍っていた。その満座の中で、源氏が、女三の宮を、一門の誇とする東宮の女御を超え、六条の院の最高位の女主人として、崇め尊ぶ様を公示したことになってしまった。紫の上は下位に斥けられた形となった。六条の院の秩序――世俗の基準に屈しないくものの本質から輝き出す美にこそ、最高の価値を認め尊重して来た独自の「秩序」が、真に美的なものの集合から生じる「調和」が、宮廷流の権威に、王座を明け渡してしまったことになった。六条の院楽土は、最後まで実体を現さない犯人の手でその核心的部分を、頽されてしまったのである。紫の上は、女三の宮の乳母たちが自分を敵視しているのをも、彼女らの朱雀院への策動をも知らない。家庭婦人である彼女は、明石の女御の父として源氏が、帝に対して卑屈的でさえあらねばならないのを全く知らない。しかし、聡明な彼女は、早くから六条の院の見えざる変容を感じ取っていた。彼女はそれを、女三の宮への源氏の愛の移行が動因だと思っている。それにしても昨夜のショックは劇しかった。源氏はその悲しみにも気付かない。まして、六条の院の独得の秩序と調和が崩壊し、今までその中心におかれていた紫の上が、最大の犠牲者となったことに気付かない。源氏の耳底には、昨夜の紫の上の演奏のすばらしい音色の残響が、まだ聞こえている。更めて、彼は、紫の上こそは理想的な妻という認識を深かめ、共に暮して来た歳月を追懐

Osaka Shoin Women's University Repository

し、わが半生を回顧して、「自分の現在の栄達は、過去の世にも比類がないが、悲しみと苦悩が絶えないことも人並み以み上だ。あなたは、私の須磨明石流離の一時期以外、心を乱すことはなかったと思う。帝の后妃といっても、みな帝寵を競う上の悩みは免れ得ない。あなたが親のもとで深窓に過したような気楽さは、他にはない。その点、あなたは人並み以上に幸福だと知っているか。女三の宮のことが辛くもあろうが、宮の輿入があったために、ますますあなたへの愛が深くなっている私の気持はよく知っているだろう。」と云った。

紫の上は

「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪えぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」

と答えて、多くを言い残し、悲しみをこらえている。源氏には「堪えきれない悲しみが、祈の役目をして、今まで保っている命」という、彼女の苦悩の深刻さに気付かず、その言葉と、悲しみに堪えている風情を美しいと受け止めている。彼は、言葉を継いで、女性観を長々と述べ、最後に紫の上を激賞して

「人により、ことに従ひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらにここら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。」

と称える。長い述懐の間中、彼の意識の流れの底にずっと、最愛の女性紫の上がいたのである。彼女ほどの完璧な理想的女性はまたとあるまいと思う。彼が彼女を「相手により、情況によって、よく心を遣いわけて気配りをしている」と褒めた言葉は、源氏は思った通りを話したのであるが、紫の上には、ひっかかるものがある。二筋に心を使いわけることが、女の身にとって、どんなに重い精神的負担であることか、彼は考えて見ようともしないのである。女三の宮の降嫁以来、紫の上の堪えて来た気苦労を、精神的苦痛を、わけても、帝が宮の後楯に加って以来の心労を、源氏は思いやったことがあるだろうか。琴の伝授にとりかかって以来、紫の上を除けものにして来たことに、気づかないのだろうか。紫の上は、源氏の心が女三の宮に移ってしまったと、その頃から疑いを持ち初めた。そう思わせたのは、源氏が幾ケ月も彼女を全く顧みず、琴の稽古に熱中していた彼の手抜かりのせいである。加えて、昨夜は、女楽の席で、源氏は、永年培って来た六条の院の秩序を放棄して、度外れなまで、宮を崇めかしづき、紫の上はわざと無視される目にあった。源氏のもう一つの側面を昨夜こそ見極めたと思っている彼女には、彼の言葉はたやすく納得し難い。源氏は彼女を完璧な女性に仕上げたと思っている、が彼女は、完璧な女性でありたいために、努力していたのではない。夫婦間の愛情の純粋性と絶対性とを保ちたいと望む[注6]本心を無理に抑えて、源氏を促して宮のもとに送り出し、夜離れを甘受し、宮に奉仕して来たのは、源氏に対する愛の誠意一筋からであった。しかしその誠意や努力が、いかにはかないものであったかを、女楽の場で彼女は知ったのであった。帝と朱雀院と、そして今や源氏を後楯に持つ女三の宮の勢力の前に、後見を欠く自分がいかに微弱な存在であるかを、つくづくと悟ったのであった。源氏の心が見えなくなり、自信を見失った彼女には、源氏の愛情の吐露も褒詞も、

Osaka Shoin Women's University Repository

もはや自分とは無関係な、無意味なものとしか受取られない。夕方、彼は

「宮に、いとよく弾き取りたまへりしことのよろこび聞こむ。」

と云って、寝殿に去っていった。今しがたまで、紫の上に対って、「思ふやうにうれしくこそありし」「いとど加ふる心ざし」「御ありさまに似たる人はなかりけり」と絶讃していた舌の根の干かぬうちに、掌を翻すようにして、平然と、女三の宮のもとに出かける無神経さ。紫の上は、昨夜心にうけた生傷が、一層深く抉られる思である。源氏の居ない夜は、女房たちに物語を読ませて宵居するのが、この頃は彼女の慣らわしになっている。物語の「あだなる男」・「色好み」・「二心ある人」、今の源氏はこのどれにも該当する。物語にはこんな話が沢山出て来るが、結局は、女は頼る相手を得て、結末がつく。紫の上は昔物語の女たちが羨しい。

「あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな……人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ、あぢきなくもあるかな。」

と考え続けて、夜更けて寝た暁方に、紫の上はついに発病した。もとはと云えば、これは乳母たちの侵しのなせるわざである。

源氏は後に、自分が他の女性に心を惹かれて、生涯様々に紫の上の心を乱したことを後悔する。中にも、女三の宮を迎えて、彼女をひどく悲しませたのを痛悔して、宮の輿入れ後三日目の雪の暁のことを追憶している（幻）。面影が、源氏の枕上に出現するほどの苦悩を味った、あの頃の紫の上ではあったが、女楽を頂点としたその前後の、彼女の心の苦痛、わけての女楽の場で受けた心の痛手の比ではない。宮の降嫁当時は、憂苦の中にも紫の上の心と源氏の心は通じあっていた。女楽の場で、女三の宮に心を移した源氏が、まるで幼い女帝に奉仕するかの如く、宮をもて囃し、紫の上は除けもの扱いを受け、屈辱感に塗れ、唯一の頼みとする源氏の心は自分から去り、六条の院が楽土としての調和と秩序を剝ぎ取られた姿を見た時の孤独感。進退窮って発病した、紫の上の生涯最大の苦悩を、源氏はついに知らずじまいであったのであった。紫の上が源氏の心を見失っていた時、源氏も亦、紫の上の心が見えなくなっていたのであった。紫の上の心を見失い、その信頼をも失っていたということは、彼にとっては、六条の院の瓦解、喪失と同義である。女三の宮の乳母たちの告げ口によって、朱雀院に対して源氏は気苦労を重ねたが、それは心の内部まで浸蝕するものではなかった。彼に紫の上の信頼を失わせた乳母たちの罪は重い。

女三の宮の乳母たちは、琴の伝授で数ケ月間、宮の許に源氏を独占し、女楽の場では、源氏から宮が正室二品内親王にふさわしく、鄭重に、華やかに、もてかしずかれ、遂に、紫の上を圧倒し、六条の院の女君の中で、東宮の御母女御よりも上座に就くのを見た。彼女らの永年の不満は解消した筈である。しかし、朱雀院は、女三の宮の待遇が改善せられたという報せを受けなかった様である。二年後に、物語は、次のように語っている。

（朱雀院の）御心のうち、限りなううしろやすくゆづりおきし御ことをうけとりたまひて、（源氏は）さしも心ざし深からず、わが

Osaka Shoin Women's University Repository

思ふやうにはあらぬ御けしきを、ことに触れつつ、年ごろ聞こしめしおぼしつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらむところもくちをしうおぼしわたるに……（柏木）

気位の高い乳母たちは、源氏が帝と朱雀院とに対して尽した心遣いに思い至らず、内親王に対する当然の措置として見流しにしたのであろうか、あるいは、二品内親王に対して、紫の上や明石の君が同席し合奏するのを「めざまし」と受け止めたのであろうか。

女三の宮の乳母たちが、源氏の、宮に対する処遇に不満を抱いたところから発した一連の玉突き現象――乳母たち→朱雀院→帝→源氏→紫の上という連動現象は、女楽の場において頂点に達するが、主謀者乳母らの側には何の成果も結ぶことなく、源氏と紫の上の心の結合に回復し難い深い傷を負わせて、二人が築いてきた六条の院楽土の最も核心的な部分を崩壊させてしまったのであった。

（注）

1 『源氏物語』の本文は、石田穣二氏・清水好子氏校注、新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社刊）に拠る。

2 玉上琢弥博士著『源氏物語評釈』第七巻

3 「源氏は身分により、また既成の価値によって女を選んだのではない。彼自身の標準で選んだのだ。彼の美意識がすべてに優先し、われわれは彼源氏のとらわれざる判断に拍手を惜しまなかったのではなかったか」（玉上琢弥博士著『源氏物語評釈』第七巻　第五一頁）

4 「管絃着座次第。琵琶、箏、和琴、笙、横笛、但行道時。横笛自レ笙前立。篳篥。（下略）」俊鏡著『絲竹口伝』

5 『御遊抄』に、管絃の座で上皇等に、その師が、楽器の調絃をして奉る実例が見える。

6 一夫多妻制下にあって、しかもなお、夫婦間の結合の純一性を希求する紫の上に、作者は、女性の側から見た「女性の理想像」を描いているのではなかろうか。稿を改めて考えてみたい。